

猪犬と登る猪猟の頂点へ 猪猟の上級編 ⑥ 田宮治

犬たちを信じる

「虎穴に入らずんば虎子を得ず」とは、大きな危険をおかさなければ、めざましい手柄は立てられないという意味である。

この故事のように、私が推し進めてきた猪猟道の中で、迎えた最高の難所をこの一秋（上級編）で自信を持って敢行し、絶対に乗り越え完成させてやりたいと思っている。それは一流猪犬群による激戦に打ち勝つ決め手となる猪への寄り付き方法と、五〇センチから三メートルまで近寄って犬たちを銃口で交して撃つ「止め刺し撃ちの近射技術」の修得である。

止め猪対策では、同じ意味で重要な止め猪の止め刺し技術の完成である。この極意は何度も力説し

実践してきたとおりで、繰り返しの度にも挑戦して、いつでも即実行できるまでに完成させておきたい。無理して格好つけているわけではないが、このような止め猪猟が実戦できるのは当然のことで、犬群が一流芸になっていなければ決してできない。

並の犬芸では、どの技一つ使うにしても恐ろしくて敢行できるものではない。例えば、千葉での猪止め現場は、山が低くてなだらかなので、並の犬群では到底止められない。たまに止められたとしても、猟人が近寄れば猪は必ず突っ走る。

その原因は、猪が止まる場所にある。つまり、大山で見通しよい他県の猟場では、谷底の滝壺とか大木の根元に大猪は弱点の尻を守るようにして止まるが、千葉では

踏み込みが困難な真竹の枯れ竹藪とか、篠竹の大藪と決まっている。この止め現場の違いが実戦での戦い方で大きな相違となるのである。

まずこれを難題と位置づけ、果敢に挑戦しているのが大藪の中に分け入っての特攻的な戦術である。ここまで説明すれば、できる猪猟人ならば十分理解いただけると思うが、見通しの利かない踏み込みにくい大藪の止め現場となると、絶対条件となるのが一流犬群である。強烈な力で猪を振伏せしめる圧倒的な咬み止め芸が完成していない限り、どんな達人であったとしても、迂闊に寄り付けるものではない。

危険を承知の上で、絶対の自信を持ってこの大藪の止め現場に分け入られるのは、犬たちを信じて

いればこそである。何の不安も感じない昼間の光景が、暗くなった夜になると怖くなるのは周りが見えない上からである。大藪の中は見えない上に身動きもままならない。そんな大藪での激戦は、まさに恐ろしい興奮の坩堝である。

ワン、ワン、ガン、ガン、グオー、グオーの犬たちと猪の攻め合いに急ぎ立てられながらも、ゆっくりと落ち着いて一歩また一歩と枯れ竹を這って潜り、音のないように乗り越えて、なんとか五、六メートルまで寄り付くことが大切である。

その間も銃口は必ず身体の前に向けて持ち、いつでも撃てる体勢でじっとその場で様子を見ることである。

犬たちはどんな激戦の中でも主人の動きは分かっている、し



(上) 千葉の猟場は低いが、大藪続きの長い大峰が何本も並び立っている。猪は長峰を走り、越えて、どこまでも逃げる。当然、犬芸が良い犬たちでなければ勝負にならない

(右) 猪の餌である竹藪はどこに行ってもたくさんある。真竹、孟宗竹の見事な大藪は猪の棲む条件だ



ばらく待っていれば、必ず「そろ、近寄って撃て！」というように一斉に咬み込み、猪を動けなくする。その一瞬のチャンスを見逃さず、一気に飛び出し、刺すようにして確実に撃つのが一番安全で良い方法である。

当然、撃ち込みができるのは散弾銃である。ライフル銃は威力が強すぎて危険なので絶対にやめること。ちなみに、千葉県では大物猟でもライフル銃は禁止されている。ライフル銃で堂々と大物に挑める山梨県や群馬県などの猪猟になると、同じ猪犬群を使っても猪猟方法そのものががらりと変わってくる。つまり、ライフル銃の威力によって猪の撃ち獲れる範囲が

拡大するのである。群馬県の猟場は下仁田を中心に篠竹藪が多くあり、千葉県と同じ攻め方が必要な猟場もある。一方、長野県や山梨県は日本有数の山岳地帯であり、一つの山が大きく高いため、大峰を越え大谷を渡っての追走などは不可能である。猪を狩り進むのは山の七合目か

八合目にある猪道に乗って狩るか、さらに上の大峰筋を下に向かって追い落とすように狩るのが単独猟（二、三人猟）では一番良い犬群の誘導である。そうすれば、いざ猪が出た時に飛び下りるだけなので、安全で攻めやすく有利である。大山では猪の止まる場所のほとんどが谷底である。

山岳地帯の猟場は全体的に見通しがよく、若犬の仕上げにとってはお動きがよく見えるので最高に良い。

犬芸がいま一つであっても、七合目くらい猪道に乗って狩っていれば、犬たちは全く自由に猪道の上と下を上手に狩り込みながら進むことになる。犬たちを先導する主人は、経験から分かっている猪の寝屋の一つひとつを拾うように、また串刺しにするように狩り進んで行く。

さらに、ここで注意しておきたいことは、山の状況と猪の飛び出す方向を考えながら、寝屋近くでは必ず上のほうから攻め込むのがポイントである。

若犬や犬芸ができていない仕上

芸も猪猟技術も最高点まで押し上げていきたいのである。

原点到立ち帰る

人間は何事をやり遂げるにも一番大事なことは、物事のよりどころとなる大本が盤石であることである。つまり、原点到立ち帰り、頑張るに挑戦して、どこまで登っても揺るぎないしっかりした土台

を築いておくことが何よりも重要なことである。

私はこの歳になっても難題に突き当たり、猪猟が思いどおりにならないことがある。いわゆるスランプに陥り悩んだ時は、繰り返し追っても逃がし、それでも頑張っていた若い頃を思い出し、原点である山梨県の猟場に立ち帰り、もう一度やり直してみる。これはなかなか良いもので、学び直す価値

は実に大きい。

特に仔犬を綱引きして鍛え、引き込む猟場は勝手知ったる山に限る。そうすれば、犬群をどこから入れるとどの辺りで犬たちが鳴き出し、また猪がどこを通過してどのように逃げるかなど、猪猟の大切な流れがすべて分かっているの

はこんな猟場で実戦するのが一番良い方法で、慣れ親しんでいる猟場だから苦労や挑戦時間も半分くらいで確実に仕上げられる。私は自分で迷い苦しみながらやってきた猪猟道を、実戦の体験に基づき何度も繰り返し発信し続けている。それは猪猟を志した猟人の誰もが、仔犬の仕上げ方や猪猟法の近道に乗って何も迷うことなく、楽しみながらすんなりと独自



- (上) ボス号×奈智号（ツルを大事に）。ボス号はチヒロ号の仔で二代目ブル号と兄弟犬。奈智号はクマ子号の仔で、父は富士雄号
- (中) 名犬の道。この組み合わせは良い仔犬で、みな良い芸を出す。あとはどれだけ訓練を積むか、ただそれだけのことである
- (下) ボス号。自慢の牡犬で、良い仔犬を多く出している（とにかく強い）

の猪猟道を完成していただきたいからである。

例えば、ちょうど船が母港を基地として出港と帰港を繰り返す、悪天候を凌ぎ、心身を癒し、態勢を整えてまた大海に出て行く、という大仕事をやり遂げているように、独自の猪猟道などは基地となる良い猟場なしでは一足飛びに完成できるものではない。誰でも失敗や挫折はある。そんな時に必要となってくるのが、母港であり基地となる心やすらぐ良い猟場なのである。

猪猟人であれば誰でも慣れ親しんだ猟場の一つや二つは必ず持っていると思うが、大事なことは、この猟場を十分に生かして使っているかどうかということである。

私は自分でやってきた猪猟の体験を基に、一番良いと思っっていることを誰にでもできる簡単な方法で発信し続けているが、なかなか的確に伝え切れていないと思っっている。その原因は、単独での猪猟法や犬芸の完成までも、独立独立歩の鍛錬によってのみ出来上がっているからである。

独自の猟技術を修得するには、繰り返し繰り返し繰り返しが大事な秘策であり、できないことを何度でも自ら挑戦してできるようにするのが基本である。物事の達成や猟道の完成は、この基本（基地）を中心に何度でも繰り返し実戦の体験が重要である。前進と反省、完成と修正の反復訓練で、どんな激戦でも完勝できて揺るぎない確固たる土台を構築するのである。

しかし、起点となる戦いの完勝や猪猟法の完成は、大きく前進するための通過点となる猪猟道の基本となるもので大変重要である。さらに頂点付近の激戦では、この土台の上に立って猪猟道に対する考え方と取り組み方が大切となってくる。

例えば、投手の場合、基本の直球がビシビシ投げられ、思いどころに決まっていればこそ、変化球もその威力を発揮する。つまり、ここぞという時に投げ込む渾身の一球が大事な戦いを制し、見事勝負に打ち勝つのである。本物の実力とはまさにそのような仕事をすることである。

基本を極め、その上に立って鍛錬の一球をどこでどのように使うかをよく考え、緊急時でも慌てることなく直球勝負でビシッと決めることである。

どんな実戦を積み重ねることでも、犬芸と猟技術を高めて「こんな時にはこの一球しかない」といったような自分に合った猪猟法を生み出し、変化球などで緩急を織り交ぜ、どんな時でも思いどおり自在に操れるようになるまで投球技術を磨いておかないと、大藪の中での大猪との激戦に完勝することはできない。

完勝の条件

千葉県の大藪の激戦は怖いので、「あんな恐ろしい所に本当に入って行くのか!」「あんな藪の中ですべて撃つんだ!」と、北嶋氏や私に連絡してくる猪猟人からも多い。全国の猪猟人からも、止め猪猟が懸案であるようにそんな問い合わせが多いのは、誰も入れない大藪に立ち入ったの勝戦が想定外ながら、犬たちを守る

にはその方法以外にないと気付いてくれたからだと思っっている。

「怖い、恐ろしい」では、藪の中で犬たちが猪を止めているのだから、勇気を持って入らなければ犬たちを守れないし勝負にもならない。大藪の止め現場を一度でも体験したことがある猪猟人であれば、当たり前のことだが、誰も獲れない猟場で難なく面白いように大猪が獲れると聞けば俄かに信用できるはずがない。だから話題になつたり、疑問視されるのは当然のことであり、全国からも凄いや響がある。

一流猪犬群による止め現場は想像以上であり、この撃ち方が安全で一番良い猟法であるということを一戦一戦をありのまま上級編を、一戦一戦をありのまま上級編として発信し続けてきた。しかし、実際の現場の戦い方を見ない限り、なかなか分かっていただけなのは仕方ないと思っっている。一流猪犬群による止め現場は、どんな山であろうと猪はきつちり止められ、簡単に動けるものではない。したがって、タツを張つたり、待たつたりしていたのでは話に



暑かろうが、寒かろうが、犬飼いに休む暇などない。そこにあるのはまさに重労働である。だが、その先にはたまらない猪猟の極地が待っている

ならない。ここは度胸を据えて虎穴(大藪)に入ることである。そうすれば恐ろしさは面白さに変化して、あっさりとして虎子(とらこ)が得られるはずである。

どんな猪猟の達人であったとしても、大藪の外を回りながらまごついていたので、どんなに頑張っても、猪が撃とうとしたところで、猪が見えないのだから撃てるわけがない。少しでも早く攻め込むことが肝心で、分け入らないことには勝負にならない。

しかし、私が一番良いと信じて推し進めている必勝法は、誰もが安心して実践できる完勝法ではない。あくまでも犬たちが止め芸に

優れ、止め猪を絶対に動けなくする強い咬み止め芸を持っていて、猪猟人も実戦に慣れていることが必要条件となる。

このような犬群を守るための大藪での作戦だから、主人となる猟人の腕前だとして並の猪猟人では務まらない。当然、主人は犬たちがケガをしないように勇気を持って守らなければならない。犬たちも主人に向かって突いて出て来る猪の鼻先に食い下がり、いつでも主人との間に分け入るくらいの猪芸をこなさなければならない。

また、主人が入って行かなければ、一頭が戦列を離れて迎えに来るように、どこまでも主人と犬た

ちが守り合う信頼関係が出来上がっていることが、完勝法の条件なのである。

この自信がない場合はやめたほうがよい。無理して推し通せば思わぬ大ケガをしたり、一流犬を失うことにもなりかねない。

仔犬の時から汗まみれで頑張っても、苦勞の連続でやっと猪を止められるまでになった若犬たちであっても、大藪での激戦は猪が断然有利であり、攻めるのも逃げるのも猪の思いのままである。生半かな猪猟技術で寄り付き方を一歩間違えば、一瞬にして若犬たちは終わりである。これから何年も楽しめる期待の若犬であっても、たった一度の間違いで取り返しのないことになる。

猪止め犬で単独猪を志したからには、それくらいの覚悟は必要である。ぶち当たる現実(現実)は想定外のことばかりで、猪猟人と猪犬たちの実力は実戦を重ねることで高まるが、同様に戦うレベルが上がっていくに従って危険も増大するという皮肉な結果になっている。

特に、頂点辺りにたどり着いた

一流猪止め犬たちの猪止め芸は、半端なものではない。だからこそ、増大する危険は、自らの努力で猪技法や犬芸を極地にまで成長させることで取り除くのである。安全と安心の楽しい独自の猪猟道を目指し、さらなる高嶺(たかね)の月(成)功して何の心残りもないさま)を追い続けることが重要となる。

そんな猪猟の当たり前の事柄でも、苦勞を重ねて一度でも頂点に立ってみたいことにはなかなか下界の大切な物事や絶景が見られないし、分かりもしない。それでも何とか分かっていただきたくて一戦一戦の戦いぶりを発信して、前記に掲げた二秋の目標や大藪の必勝法をこと細かく何度も繰り返して説明してきたのである。

どんなに説明したところで、しよせん私が登り続けてきた猪猟道の中であって、これこそが最高だと信じて実践している俺流猪猟法の押し出しであり、独断先行の強烈な止め猪対策なのだから、なかなか理解していただけないのも当然である。

残念だが、猪猟法も猪犬仕上げ

も元々すべての面で、使役法から完成まで獵人の考え方は人それぞれなので仕方ないことだと思っ
ている。危険だから……、難問だから……といつて、やってもみな
いでただ分らないことを理由に諦めるのではなく、自らやってみ
ることで、良い猟法をどんどん取り入れ、自分に合った独自の猪
道を完成してほしい。

「猪犬と登る猪猟の頂点」に上級編と銘打ってまで特別に押し進めて広めたいことが、強烈な止め猪から大切な犬たちやわが身を守るための、一流猪犬群で実践する最高で最良の攻め方であり、守り方である。

大藪での至難の完勝法と頂点までの道順を何度も繰り返し発信し続けているのは、どんな立派な理論解説よりも一目で分かる究極の一戦だと思っているからである。

そんな止め猪猟を実戦でやって見せることで、「こんな時にはこのように攻めるのが一番安全だ」「ここではこの撃ち方よりほかにない」というように、どんなに分かりにくい猪止め現場でも先頭に

立って体験して得た俺流の教え方なのである。つまり、俺ができる最高の止め猪猟を実際にやり抜く姿を、人様に見て理解してもらいたいのである。

特に頂点を極めるとなると、登る道順から目標までのすべての面

ば何の問題もないが、人様に分かっていたかどうかとなると、なかなか大変なことで容易ではない。まして上級編ともなれば難題ばかりで、これが一流芸でこんな戦いが

完勝だというような、誰が見ても一目で分かる正解を明確に出し続



枯れ篠竹原の激戦。ブイ号、カツ号、武蔵号、千代号の四頭ぞっくり揃っての一齐攻撃で猛猪もこのとおりに。綱引きの特訓がここで生きる。無傷の完勝である

で、最良で最短、安全で安心、その上で至上の楽しみが得られるよ

うな、誰が見ても正しくて良い正道であることが一目で分かるものでなくてはならない。

たかが猪猟であっても、単独で愛犬たちと楽しんでいるのであれ

けなければならぬのである。

当然、登るにつれて目的達成の難度も高まり、至難の頂点付近ではどれ一つ実践するにも勝負の分かれ目は紙一重となってくる。

猪猟の完成に必要なことはただ一つ、思い立った夢を必ず実現さ

せる挑戦心だけだ。猪猟は真剣勝負である。一対一の止め猪猟では、どうあがいてみたところで誰かが助けてくれるわけではない。挑戦心を頼りに実戦を繰り返し鍛え上げていかなければならない。自らの頑張りや犬芸でも猟法でも失敗の中から学び取るもので、どこまで登ってみたところで完成とか頂点はない。人はこれで完成だと思った時点でその成長は止まる。ところが、頂点と知った時点で、また次の頂点があることを知り、真の猪猟道が見えてくるのである。

上級編ではこのことが大事な挑戦の要所であり、本物の実力が物を言うのである。夢の頂点にたどり着く猪猟の近道や進化・改善を中心に、はっきりと見えてきたあたりで実践するのが大切である。

これが人生を懸けた大好きな猪猟なのだから、自ら楽しむのもちろんのこと、俺流の良いものをどんどん発信していき、難所の止め現場も一発で答えが出るような一戦一戦をお届けしたいと思っ
ている。
(つづく)